

富山市立図書館

図書館だより

第42号
2010.10

雑誌の新しいかたち

紙媒体からデジタル化へ

相次ぐ雑誌の休刊

ここ数年、雑誌の休刊のニュースを耳にすることが多くなりました。少し前になりますが、講談社の「月刊現代」の休刊など、長年親しまれてきた雑誌も例外ではありません。富山市立図書館で所蔵している雑誌でみると、平成 21 年から 22 年現在までに休刊した雑誌は 16 誌になります。16 誌の内訳をジャンル別にみると、趣味・芸術が最も多く 4 誌、次いでコンピュータ・インターネット関係が 3 誌となっています。雑誌の販売部数は 1995 年をピークに下降し続け、売上では、1995 年から 2009 年にかけて約 4 割減少しています（※1）。

雑誌の休刊が相次ぐ背景としては、インターネットや携帯電話の普及により、必要とする情報を入手する選択肢が増えたことや、趣味・嗜好の細分化、不況による企業広告の撤退など複数の要因が考えられます。

各出版社では雑誌の存続をかけて対策を講じていますが、その一つが雑誌のデジタル化です。気軽に手に取り、興味のある部分を拾い読みできるといった従来の紙媒体の利点とは別に、汎用型デバイス（※2）への対応や、消費者が複数のタイトルからコンテンツ（情報内容）単位で必要な情報を得ることを目指した雑誌のデジタル化が今、進んでいます。

デジタル雑誌の登場

2007 年、小学館の有料オンライン雑誌サイト「SooK（スーク）」や、主婦の友社の「デジタル ef」など、デジタル版に特化した雑誌の形態が現れ始めます。また、同じ年には、オンライン書店を運営する富士山マガジンサービスが、デジタル雑誌の購読を取り扱う「富士山デジタル」を開始します。

このような雑誌デジタル化の流れのなか、同じく 2007 年に日本雑誌協会が販売協会の下部機関として「デジタル出版研究会」を発足させます。2008 年 11 月には国際雑誌連合(FIPP)と日本雑誌協会の共催で、第一回「アジア太平洋デジタル雑誌国際会議」が開かれました。これは、世界の出版経営者がコンテンツのデジタル化について議論する会議でしたが、日本においては各社の個別のデジタル対応ではなく、共同で行う案が出されました。日本の出版社の多くは規模が小さく、自らデジタルコンテンツを販売する場合に、システムの運営を行うことが難しいからです。

これにより日本雑誌協会が「デジタルコンテンツ推進委員会」を立ち上げます。その後、この委員会から雑誌コンテンツのデジタル化と有料配信を目指して「雑誌コンテンツデジタル推進コンソーシアム」が設立されました。このコンソーシアムでは、

※1 『2009 出版指標年報』（社団法人全国出版協会・出版科学研究所）より

※2 携帯電話や iPhone、iPad など

各出版社から集めたコンテンツをジャンル別に分類し、その一つひとつを小額で販売するというビジネスモデルを打ち出しています。今年1月には、総務省の補助金でデジタル雑誌記事の配信実験を行いました。これが実用化されれば、消費者は自分が必要なテーマについて雑誌や他のメディアから選択し、見たいものだけを購入するというスタイルも可能になります。しかし、実用化にはいくつかの問題点があります。

デジタル雑誌の抱える問題点

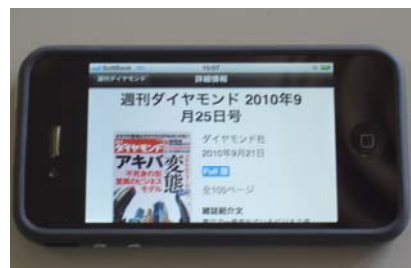
デジタル雑誌のコンテンツ販売にあたって問題の一つとなるのは、著作権の問題です。雑誌は、個々の記事や写真の集合体であり、それぞれに著作権が発生します。月刊誌や週刊誌の場合、今までは次号が刊行されるまでの著作権使用契約でした。しかし、雑誌がデジタル化されれば、週刊や月刊という期間に関わらず、半永久的に販売されることとなります。また、雑誌の記事内容や写真はその号のために製作されたコンテンツでしたが、これをデータベースに保存すれば再利用が可能になります。このため、新たな契約のあり方が必要となります。

日本雑誌協会では、日本文芸家協会と日本写真著作権協会に、デジタル雑誌の販売時に作家や写真家らの著作権を一定期間に限って出版社に譲渡するガイドラインを提案し、協議しています。このガイドラインでは、著作権が譲渡される期間内ではデジタル雑誌分の原稿料は上乘せされず、期限を超えてデジタル雑誌を販売する場合は、出版社と著作者が対価を支払うか個別に交渉する案が出されています。(※3)

また、デジタル雑誌を読むための機器の問題もあります。デジタル雑誌の普及には簡単な操作機能や携帯性のある機器が必要です。その一つとして、iPad や iPhone に対応したデジタル雑誌も登場しています。

コンテンツの問題でいえば、記事内容を単にデジタル化するのではなく、読むための機器に合ったレイアウトが必要になります。

また、デジタル化する雑誌の読者層に応じてデジタル化の目的やマーケティングの方法を考える必要もあります。これには出版社の編集者や電子出版に関連する担当者の力量が問われています。



(iPhone でのデジタル雑誌購入画面)

雑誌のデジタル化時代における図書館の役割

デジタル雑誌の普及には、著作権処理や機器の問題があり、一般に普及し市場が形成されるにはまだ年数を要します。しかし、紙の雑誌が今後さらに減少していくことは明らかです。その中で、雑誌を資料として扱う図書館ではどのような役割を担うことができるでしょうか。

これまで図書館で雑誌資料を閲覧できるメリットは、豊富な種類の中から選んで借りることや、バックナンバーを閲覧できることにありました。デジタル雑誌が今後さらに制度を整備していけば、課金ということを除いて、これらのメリットを兼ね備えることとなります。一方で図書館でのデジタル雑誌の閲覧は、課金や著作権の問題の解決など、導入までには時間を要すると考えられます。

仮に導入された場合、図書館にとってはバックナンバーの保存スペースが不要になります。しかし、気軽に手に取りページをめくることや、貸出については簡単にできなくなります。従来の紙媒体の雑誌が持つ利点をデジタル雑誌によってどの程度カバーできるかという点が、今後の図書館でのデジタル雑誌導入においても問題になるといえそうです。

(本館 沖)

(参考図書 下記の資料は富山市立図書館で所蔵)

- ・『電子書籍と出版』
(高島利行／ほか著 ポット出版 2010)
- ・『出版産業、改革待ったなし!』
(本の学校／編 唯学書房 2010)

※3 朝日新聞 2010年9月12日付 「電子雑誌 著作権処理に指針」による。

エッセイに見る「父と娘」

作家の中には、親子二代に渡り活躍している人が少なくありません。今回は、その中から偉大な父を持つ娘たちに注目しました。飾らぬ日常を綴ったエッセイからは、作家たちの意外な素顔が見えてきます。



『父 その死』
幸田 文／著
新潮社 2004

明治を代表する文豪幸田露伴を父に持つ幸田文は、露伴の臨終と葬儀の模様を記録した作品で文壇デビューしました。この本には、その作品とともに若き日の思い出を綴ったエッセイ『こんなこと』が併録されています。

文は、掃除の仕方、障子の張り方など母親から教えられる筈であろうことを、すべて露伴から習っています。文 16 歳の時に始まった、露伴直伝の家事一切の特訓。まずは自分がやってみせて、講釈するというのが露伴流だったようです。使う道具や立てる音、所作にまでこだわるといふ徹底ぶり。文も負けてはおらず、生来の快活さでもって、日々の家事をこなし、生活能力を身につけていきます。それにしても、家事だけではなく、白粉の塗り方まで習ったというのですから、露伴の器用さに驚かされます。

しかし、露伴は厳しいだけではなく、よく子どもたちと遊んでいました。文も、父が遊びに加わるのとそうでないのでは、その楽しさは大違いだと語っています。『新潮日本文学アルバム 幸田文』（新潮社 1995）では、幸田家伝統のはたきや文が刺繍した半襟（腕前はプロはだし）、一家が過ごした蝸牛庵の写真を見ることができます。

森鷗外の娘茉莉も同じように父の回想録でデビューしました。『父の帽子』（筑摩書房 1974）は、茉莉の初期のエッセイを集めたものです

ドイツから取り寄せた沢山の子ども服、語り聞かせる白雪姫やシンデレラなどの物語の数々。「よし、よし、おまりは上等よ」（『幼い日々』より）と鷗外が溺愛したことから、茉莉は、家事はおろか自分の身の回りのこともできないようなお嬢様に育ちました。

文豪を父に持ち、同じ時代を生きた文と茉莉。一度は嫁いだものの、離婚、そして父の死後にデビューするなど共通点の多い二人ですが、その作風はまったく違います。父親の教育方針の違いが、二人の作品に大きく影響していることが伺えます。父を敬い、慕い続けた二人の作品を読み比べるのもおもしろいものです。



『蛙の子は蛙の子
父と娘の往復書簡』
阿川 弘之、阿川 佐和子／著
筑摩書房 1997

小説家阿川弘之の娘佐和子は、原稿が書けず、母にあたり散らす父を見て、物書きとは嫌な商売だと思っていたそうです。ところが、傍から見れば、お父ちゃんそっくりの彼女は、同じ文筆業の道を進み、エッセイストとして活躍しています。

父と娘が書簡という形をとり、孤独・愛・恥などのテーマで論議するこの作品は、お互いの人生哲学が散りばめられ、ユーモアに溢れています。

最後に紹介するのは、阿川弘之の麻雀仲間でもあった随筆家江國滋が、娘である小説家江國香織の誕生から 6 歳までの成長を記録した『香織の記録』です。時にスケッチを織り交ぜながら細やかに記されており、幼い娘の一挙手一投足に一喜一憂する姿が目には浮かぶようです。ほほえましいエピソードが満載のこの作品は『江國香織とっておき作品集』（マガジンハウス 2001）に収録されています。

（本館 瀬口）

岩倉政治文庫の資料 其の十三

岩倉政治文庫には、高岡出身の画家である盤若一郎が描いた、岩倉の大きな肖像画があります。「風のまにまに」は友人だった2人の合作で、岩倉の文章に盤若が絵を付け、平成4年から1年以上にわたって富山新聞に連載されました。遍路・巡礼の旅になぞらえ、北陸に真宗王国の礎を築いた蓮如の跡を2人が巡ります。

「足の向くまま気が向くまま」の旅にふさわしく、その内容も筆の向くまま、蓮如のことにとどまらず、その土地の歴史や民俗、ゆかりの人々、自身の思い出などが、ユーモアを交えながら自由自在につづられています。そこにはふるさと富山への愛情がにじみ出ており、何とも味わい深い絵とともに、富山の魅力を再発見することができます。

盤若は連載終了の翌年、本の出版前に亡くなり、岩倉はその序文で「共に心血を注いだ著作誕生の喜びを分かち会えぬのが、いかにも残念至極である。」

と述べています。

図書館本館では、10月8日～12月28日に企画展示「岩倉政治交友録」を開催しています。盤若を含め、岩倉と交流があった人々に関する図書・雑誌や書簡などを展示しています。（本館 海野）



「風のまにまに」 岩倉 政治／文 盤若 一郎／絵
富山新聞社 1994年

レファレンスあれこれ

Q. 「日本人が年間に旅行する回数や、各観光地ごとの客数を調べたい。あわせて、他に観光や余暇、レジャーに関する統計データにどのようなものがあるか知りたい。」

A. 統計情報についての資料情報を調べるには、『統計情報インデックス』（日本統計協会）が有効です。この資料でテーマとなるキーワードから統計書を探すことができます。「観光」「余暇」「レジャー」というキーワードから、当館で閲覧できる資料には次のものがありました。

『観光の実態と志向』（日本観光協会）には、日本観光協会実施の「国民の観光に関する動向調査」の結果に基づいた、旅行参加率や施設の利用実態など各種の実数がまとめられています。『全国観光動向』（日本観光協会）には、各都道府県が発表した観光地入込客統計がまとめられていて、地域ごとの状況を知ることができます。『余暇・レジャー&刊行統計年報』（三冬社）では、「余暇」「スポーツ」「観光」「娯楽」など複数の分野にわたる統計数値が集められていて、日本人の志向がわかるようになっています。例として「観光」の分野では「年末年始の人出」や「宿泊予約の方法」、「海外旅行先別満足度」など、分散しがちな数値が収められています。

『観光白書』（国土交通省観光庁）や『レジャー白書』（日本生産性本部）には各種統計データを元にした観光の状況分析や施策がまとめられています。また、観光庁ホームページ内「統計情報」にもいろいろなデータが掲載されています。（<http://www.mlit.go.jp/kankocho/>）（本館 新保）